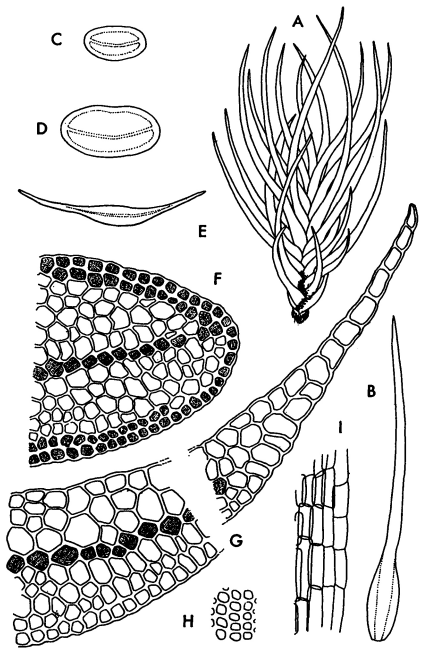
クマノゴケ　*Diphyscium lorifolium* (Cardot) Magonbo (Syn. *Theriotia lorifolia* Cardot)

【評価理由】

日本では関東地方以南、九州まで分布する暖地系のセン類。生育環境が山間の渓流沿いの陰地で、浅く水をかぶるような場所の岩上に限られている。稀産種。環境の変化に敏感で絶滅が危惧される。



A.植物体. B.葉. C.葉の上部断面. D.葉の中部断面.
E.葉の基部断面. F.葉の中部断面. G.葉の基部断面.
H.葉の中央部細胞. I.葉翼部.
高木典雄 描画

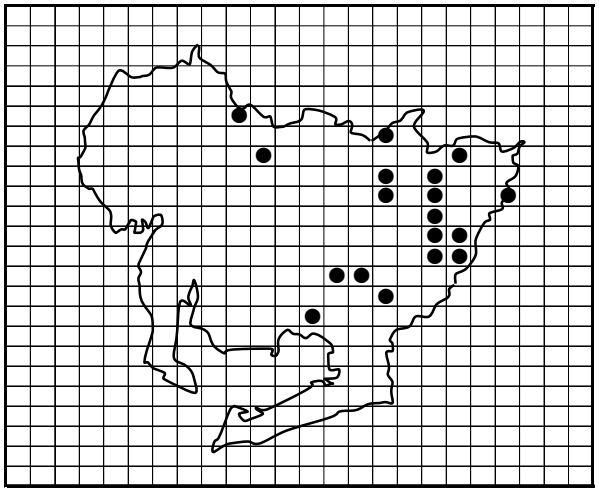
【形　態】

前述のように、狭い渓間の岩上に黒褐色の光沢のあるマットを作る。葉は幅広い基部から長く伸び、乾くと内側にゆるく巻く。葉身の大部分が太い中助によって占められるので、葉は平面というより棒状に近い。蒴はまれに着くが、葉群の中に沈生する。雌苞葉は通常葉より短く、通常葉の間にかくれる。

【分布の概要】

【県内の分布】
本種については、特に注意して調査が実施された経緯もあり、県内では三河地方に多く、約 20 ヶ所で記録されている。
【国内の分布】
関東地方を北限として九州まで分布する。
【世界の分布】
朝鮮半島、パキスタンなどに知られている。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

狭くうす暗い山間渓流内の固定した岩石の表面に、ひげが生えたように群生する。水流に流されぬように、岩面に密着している。

【現在の生育状況／減少の要因】

県内の産地は約 20 ヶ所にわたっている。山間の渓流の微妙な環境下の生育種だけに、その中の数ヶ所については消滅している模様。

【保全上の留意点】

狭くうす暗い山間渓流内の岩面と、絶えず岩面を浅く潤す安定した水流が必要という、極めて限られた条件下に生育するもので、周辺環境の保持が厳しく要求される。

【特記事項】

形態的に極めて特異で、また特異な環境に生育する興味深い種である。
本属は日本では久しく 1 種のみであったが、20 年程前にカシミールクマノゴケ *Diphyscium kashimirensis* (H.Rob.) Magombo が記録され、1 属 2 種となった。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.